

源氏物語を知る事典

目次



『源氏物語を知る事典』をお使いになるにあたって 1

『源氏物語』の全体をとらえる

『源氏物語』の書名・巻名の由来

『源氏物語』の書名の由来 13

『源氏物語』の巻名の由来 14

『源氏物語』の巻名と構成 15

『源氏物語』の構成上の特色 16

『源氏物語』の人物系図の見方 18

『源氏物語』における登場人物

男性群像 21

目次 5

光源氏・桐壺帝・内大臣・朱雀帝・夕霧・柏木・冷泉院・
左大臣・右大臣・兵部卿の宮・薫君・匂の宮・宇治の八の宮

女性群像（上流階級） 24

藤壺・葵の上・六条御息所・朧月夜・朝顔の齋院・
女三の宮・秋好中宮・弘徽殿の太后・明石の中宮

女性群像（中流階級） 26

紫の上・空蟬・夕顔・末摘花・花散里・明石の君・玉鬘・
大君・中の君・浮舟

『源氏物語』巻々のあらすじ

1 桐壺 30

2 帚木 31

3 空蟬 32

4 夕顔 34

5 若紫 35

6 末摘花 36

7 紅葉賀 38

8 花宴 39

9 葵 40

10 賢木 42

11 花散里 43

12 須磨 44

13 明石 45

14 澤標 47

15 蓬生 48

16 関屋 49

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
藤裏葉 <small>ふじのうらば</small>	梅枝 <small>うめがえ</small>	真木柱 <small>まきばしら</small>	藤袴 <small>ふじばかま</small>	行幸 <small>みゆき</small>	野分 <small>のわか</small>	篝火 <small>かきび</small>	常夏 <small>とこなつ</small>	螢 <small>ほたる</small>	胡蝶 <small>こちょう</small>	初音 <small>はつね</small>	玉鬘 <small>たまがむ</small>	少女 <small>おとめ</small>	朝顔 <small>あさがお</small>	薄雲 <small>うすくも</small>	松風 <small>まつかぜ</small>	絵合 <small>えあひ</small>
71	70	69	67	66	65	64	62	61	60	58	57	56	54	53	52	50
50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34
東屋 <small>とうや</small>	宿木 <small>しゆくき</small>	早蕨 <small>さわらび</small>	総糸 <small>あげまき</small>	椎本 <small>しいもと</small>	橋姫 <small>はしひめ</small>	竹河 <small>たけがわ</small>	紅梅 <small>こうばい</small>	匂宮 <small>におうのみや</small>	幻 <small>まぼろし</small>	御法 <small>みのり</small>	夕霧 <small>ゆづり</small>	鈴虫 <small>すずむし</small>	横笛 <small>よこぶえ</small>	柏木 <small>かしわぎ</small>	若菜下 <small>わか菜下</small>	若菜上 <small>わか菜上</small>
99	97	96	93	92	90	89	88	87	85	84	81	80	79	77	75	72

54	53	52	51
夢浮橋 <small>ゆめのうきはし</small>	手習 <small>てなひ</small>	蜻蛉 <small>かげろう</small>	浮舟 <small>うきふね</small>
104	102	101	100

光源氏を愛した女性たち

光源氏——桐壺帝の第二皇子・主人公	106
空蟬——老伊子の介の後妻・源氏の愛人	108
夕顔——頭の中将与源氏の愛人	110
末摘花——故常陸の宮の娘・源氏の愛人	113
藤壺——桐壺帝の愛妃・源氏の義母・愛人	115
六条御息所——前皇太子妃・源氏の妻	120
朧月夜——朱雀帝の妻・源氏の愛人	124
花散里——麗景殿の女御の妹・源氏の妻	128
明石の君——源氏の妻	131
玉鬘——内大臣と夕顔の娘・髭黒の妻	137

女三の宮—朱雀院の第三皇女・源氏の正妻 141

紫の上—源氏の妻・藤壺の姪 147

大君—八の宮の長女・薫君の恋人 152

浮舟—八の宮の三女・薫君の妻 157

紫式部とその作品

❖ 紫式部の人生

『源氏物語』の作者 165

紫式部の名前と由来 166

紫式部の家系と出生 167

紫式部の青春時代 169

紫式部の結婚 夫との死別 170

紫式部の娘 大式だいしの三位さんみ 172

❖ 紫式部の宮廷生活

紫式部の宮仕えの動機 173

紫式部と藤原道長の関係 174

紫式部の宮廷生活 175

紫式部と清少納言 176

紫式部の晩年と死 178

紫式部に関する伝説 179

❖ 紫式部の作品

『紫式部日記』の成立と内容 180

『紫式部日記』にみられる中宮彰子像 181

『紫式部日記』にみられる藤原道長像 182

『紫式部日記』にみられる紫式部の人間像 183

『紫式部日記』と『源氏物語』 185

『紫式部集』の内容と特色 187

『紫式部集』と『源氏物語』の関係 188

紫式部の人生の『源氏物語』への投影 189

小説としての『源氏物語』

❖ 『源氏物語』の構造はどのようになっているか

時間的構造 191

人間関係の構造 192

空間的構造 194

❖『源氏物語』の特質はどのような点にあるか

主題 196

人物造型 199

歴史的背景 201

❖『源氏物語』の文章表現の特質は

どのようなものか

『源氏物語』の文章の特徴 203

『源氏物語』の表現法の特徴 205

文学史の中の『源氏物語』

❖『源氏物語』の素材・典拠

『源氏物語』における『竹取物語』の撰取 208

『源氏物語』における『伊勢物語』の撰取 209

『源氏物語』における『宇津保物語』の撰取 210

『源氏物語』における女流日記文学の撰取 212

『源氏物語』における和歌の撰取 213

『源氏物語』における神話・伝説の撰取 214

『源氏物語』における漢詩文・中国史書の撰取 215

❖『源氏物語』の古典文学への影響

『源氏物語』の平安後期物語への影響 216

『源氏物語』の鎌倉時代物語への影響 218

『源氏物語』の室町時代物語への影響 219

『源氏物語』の歴史物語への影響 220

『源氏物語』の軍記物語への影響 221

『源氏物語』の日記文学への影響 222

『源氏物語』の和歌・連歌ねんがへの影響 224

『源氏物語』の謡曲への影響 225

『源氏物語』の近世文学への影響 226

『源氏物語』の近代文学への影響Ⅰ〔明治時代〕 228

『源氏物語』の近代文学への影響Ⅱ〔大正・昭和時代〕 229

【源氏物語】の現代語訳 230

【源氏物語】の外国語訳 231

【源氏物語】とマンガ 232

❖ 『源氏物語』の伝本・注釈・研究など

【源氏物語】の伝本 233

【源氏物語】の絵巻・源氏絵 235

【源氏物語】の梗概(ダイジェスト) 236

【源氏物語】の擬作(補作) 237

【源氏物語】の注釈史Ⅰ(旧注)〔平安末期～江戸初期〕 238

【源氏物語】の注釈史Ⅱ(新注)〔江戸時代〕 240

【源氏物語】の注釈史Ⅲ〔近代～最近の主なもの〕 241

物語の舞台…平安時代を知る

❖ 平安時代の政治と社会

平安時代の天皇制はどのようなものであったか 243

平安時代の摂関制はどのようなものであったか 244

平安時代の荘園制はどのようなものであったか 245

平安時代の給与制度はどのようなようになっていたか 247

平安時代の身分制度はどのようなようになっていたか 248

平安時代の御所(宮廷)はどのようなようになっていたか 249

平安時代の後宮はどのようなようになっていたか 250

平安時代の儀式・年中行事には

どんなものがあったか 253

❖ 平安時代の貴族の一生

平安時代の出産はどのようなに行なわれたか 255

平安時代の成人式はどのようなであったか 256

平安時代の結婚はどのようなに行なわれたか 257

平安時代の教育はどのようなに行なわれたか 259

平安時代の長寿の祝い(算賀)は

どのようにに行なわれたか

261 260

❖ 平安時代の貴族の生活

平安時代の葬式と法要はどのようなに行なわれたか 262

平安時代の服装はどのようなものであったか 262

平安時代の食事・病気はどのようであったか 264

平安時代の住居・調度（道具）は

どのようであったか 265

平安時代の娯楽にどのようなものがあったか 266

平安時代の信仰・俗信はどのようであったか 267

平安時代の暦はどのようになつていたか 268

『源氏物語』ゆかりの旅

京都御所 271

藤原道長邸 273

六条院―光源氏の邸宅 275

廬山寺―紫式部邸跡 278

野宮神社 279

大堰川 280

北山―鞍馬寺と大雲寺 282

比叡山延暦寺 283

石山寺と逢坂の関 284

長谷寺―初瀬観音 286

伊勢神宮と齋宮 287

住吉大社 288

須磨・明石 290

宇治―宇治平等院・宇治上神社 291

小野 295

収録図版出典一覧 297

索引 308

解説文中に*の付してあるものは、下段に補注的解説があることを示す。ただし、前後のページに置かれている場合もある。

源氏物語を知る事典

『源氏物語』の全体をとらえる

『源氏物語』の書名・巻名の由来

『源氏物語』の

書名の由来

『源氏物語』という名称は、一般的に広く使われているが、作者自身も『源氏の物語』と呼んでいたらしく、また『更級日記』や『今鏡』にも同様の名称が使われていることから、物語成立以後、平安時代末期ぐらいまで、最も一般的な名称であったといえよう。ところが、鎌倉時代になると、『光る源氏の物語』という名称も使用されるようになり、さらに『源氏』『光源氏』『源語』などの略称、『紫文』、『紫の物語』などの異称も見られるが、必ずしもそれらが一般的な書名であったとはいえないようである。

ちなみに、『源氏の物語』という場合の『源氏』とは、藤原氏などの氏族に対する皇族（王族）の総称であるが、『源氏物語』の場合は固有名詞である。また「光る源氏」の『光る』とは、光り輝く人、つまり理想的ですばらしい人という意味で

ある点で、かぐや姫の文学的系譜に連らなる意義をもつ美称である。

『源氏物語』の
巻名の由来

次に、『源氏物語』五十四帖の巻名は、いずれも優雅なイメージをもっており、かつては『源氏名』として親しまれたこともあった。その巻名の由来は、次のような三つのパターンに分

けられる。

- (1) その巻中の重要な和歌によるもの || 帚木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・葵・賢木・花散里・須磨・明石・滯標・松風・薄雲・朝顔・少女・玉鬘・初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・行幸・藤袴・真木柱・藤裏葉・若菜(上)・若菜(下)・柏木・横笛・鈴虫・夕霧・御法・幻・竹河・橋姫・椎本・総角・早蕨・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉
- (2) その巻中の重要な事件によるもの || 紅葉賀・花宴・絵合
- (3) その巻中の重要な語句によるもの || 桐壺・蓬生・関屋・野分・梅枝・匂宮・紅梅・手習・夢浮橋

右の中では(1)の和歌によるものが多いことが注目される。

なお、巻名の問題として、第四十一巻「幻」の次に「雲隠」の巻があるが、巻名だけが伝えられていて、内容(本文)を欠いている。主人公光源氏の死を暗示した「雲隠」の内容が伝わらなかつた点については諸説あるが、光源氏の死があまりにも悲しく描かれていたので破棄されたという説よりも、最初から書かれなかつたのであろうという説の方が真実性があるように思われる。

*1 かぐや姫 『竹取物語』の主人公かぐや姫は「光かがやく人」という意味で、理想的なすばらしい人間である。

*2 源氏名 女官・奥女中・遊女などが『源氏物語』五十四帖の巻名になぞらえて付けた愛称。

「源氏物語」の巻名と構成

第一部

光源氏の青春と栄華
 (誕生～三十九歳)

三十三帖

- | | | | | | | |
|-------|-------|-------|------|-------|-------|------|
| 31 | 26 | 21 | 16 | 11 | 6 | 1 |
| * 真木柱 | * 常夏女 | ○ 少とめ | * 関屋 | ○ 花散里 | * 末摘花 | ○ 桐壺 |
| 32 | 27 | 22 | 17 | 12 | 7 | 2 |
| ○ 梅枝 | * 箒火 | * 玉鬢 | ○ 絵合 | ○ 須磨 | ○ 紅葉賀 | * 帚木 |
| 33 | 28 | 23 | 18 | 13 | 8 | 3 |
| ○ 藤裏葉 | * 野分 | * 初音 | ○ 松風 | ○ 明石 | ○ 花宴 | * 空蟬 |
| | 29 | 24 | 19 | 14 | 9 | 4 |
| | * 行幸 | * 胡蝶 | ○ 薄雲 | ○ 滯標 | * 葵 | * 夕顔 |
| | 30 | 25 | 20 | 15 | 10 | 5 |
| * 藤袴 | * 螢 | ○ 朝顔 | * 蓬生 | ○ 賢木 | ○ 若紫 | |

(○印は紫の上系の巻、*印は玉鬢系の巻)

第二部

光源氏の晩年と悲劇
 (三十九歳～五十二歳)

八帖

- | | |
|------|-------|
| 39 | 34 |
| 夕霧 | 若菜(上) |
| 40 | 35 |
| 御法 | 若菜(下) |
| 41 | 36 |
| 幻 | 柏木 |
| | 37 |
| (雲隠) | 横笛 |
| 巻名のみ | 38 |
| | 鈴虫 |

第三部

薫君の青春と愛の悲劇
 (薫君 十一歳～二十八歳)

十三帖

- | | | |
|-----|----|----|
| 52 | 47 | 42 |
| 蜻蛉 | 総角 | 匂宮 |
| 53 | 48 | 43 |
| 手習 | 早蕨 | 紅梅 |
| 54 | 49 | 44 |
| 夢浮橋 | 宿木 | 竹河 |
| | 50 | 45 |
| | 東屋 | 橋姫 |
| | 51 | 46 |
| | 浮舟 | 椎本 |

(「橋姫」以下の十帖を「宇治十帖」という)

『源氏物語』の構成上の特色

- (1) 『源氏物語』五十四帖は、三部構成となっており、第一部と第二部とからなる正編（主人公光源氏^{ひかるげんじ}）と、第三部からなる続編（主人公薫君^{かおるきみ}）とに分けられる。正編と続編には、同じ作者と思われるほどの落差が見出される。
- (2) 第一部における構成上の特徴は、二つの異なった系列の物語が組み合わされていることである。一つは、紫の上系の卷々（○印）で、長編的・理想的な世界、もう一つは、玉鬘系^{たまかざら}の卷々（*印）で、短編的・現実的な世界である。
- (3) 第二部における構成上の特徴は、卷々の分量が相対的に多く、特に「若菜」の巻は異常に長く、上下に分かれているほどである。それは第二部が、第一部とまったく異なった新しい世界を始発させようとする作者の意気ごみの必然的な結果であると考えられる。
- (4) 第三部における構成上の特徴は、全十三帖のうち、「橋姫」の巻以下の「宇治十帖」と正編とをつなぐ、いわば「つなぎの三帖（匂宮・紅梅・竹河）」があり、内容的にみてあとから補足されたような感じを否定できないという点である。
- (5) 『源氏物語』の卷々の分量（長さ）は、複雑な執筆の過程を経ていることから、かなり大きな差異がある。ちなみに、卷々のおよその分量を計算してみると、次のようになる。

『源氏物語』各巻の長さとお歌の数

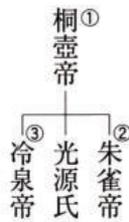
巻数	巻名	ページ数	歌数	巻数	巻名	ページ数	歌数
1	桐壺	31	9	28	野分	22	4
2	帚木	57	14	29	行幸	34	9
3	空蟬	14	2	30	藤袴	18	8
4	夕顔	59	19	31	真木柱	47	21
5	若紫	59	25	32	梅枝	23	11
6	末摘花	39	14	33	藤裏葉	30	20
7	紅葉賀宴	35	17	34	若菜(上)	126	24
8	花宴	14	8	35	若菜(下)	125	18
9	葵	59	24	36	柏木	50	11
10	賢木里	63	33	37	横笛	24	8
11	花散	6	4	38	鈴虫	18	6
12	須磨	56	48	39	夕霧	88	26
13	明石	50	30	40	御法	24	12
14	滯標	41	17	41	幻	28	26
15	蓬生	28	6	42	匂宮	18	1
16	関屋	6	3	43	紅梅	16	4
17	絵合	23	9	44	竹河	53	24
18	松風	27	16	45	橋姫	46	13
19	薄雲	38	10	46	椎本	47	21
20	朝顔	26	13	47	絵角	111	31
21	少女	62	16	48	早蕨	24	15
22	玉鬢	50	14	49	宿木	115	24
23	初音	18	6	50	東屋	78	11
24	胡蝶	26	14	51	浮舟	87	21
25	螢	24	8	52	蜻蛉	70	11
26	常夏	27	4	53	手習	84	28
27	篝火	5	2	54	夢浮橋	21	1

(注) ページ数は新潮日本古典集成『源氏物語』(1~8)による

『源氏物語』の人物系図の見方

- (1) 『源氏物語』は、作者紫式部が生きた時代よりも八十年くらい前の歴史をふまえて書かれた、一種の歴史小説であるとみることがもできる。次のように『源氏物語』と皇室の系図を対比してみるとそのことがよくわかる。

〈物語〉



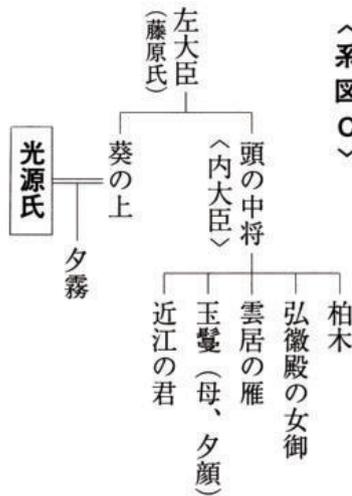
〈歴史〉



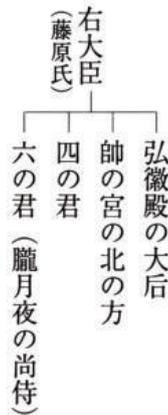
- (2) 『源氏物語』は、系図的にみると、桐壺院を中心とする王族の物語で、桐壺院—光源氏—薫君の三代にわたる物語である。系図的にいえば、〈系図A〉と〈系図B〉との関わる王族の物語が、〈系図C〉及び〈系図D〉の藤原氏の物語と対立的に展開されている。

- (3) 〈系図B〉は〈系図A〉の桐壺院とは別系統の先帝せんだいを中心とした王族の系図で、藤壺の中宮—紫の上—女三の宮と続く、いわゆる「紫のゆかり」の女性たちの関係を示している。藤壺の中宮を基軸に考えると、紫の上は姪めい（兄の娘）、女三の宮も姪（妹の娘）にあたり、また紫の上と女三の宮は従姉妹いとこの関係になる。

〈系図C〉



〈系図D〉



(4) 〈系図C〉の左大臣家、〈系図D〉の右大臣家は、ともに藤原氏であり、〈系図

A〉と〈系図B〉の王族に対立している。それは、歴史上の藤原氏対王族の政治的対立を反映したものであるが、『源氏物語』においては、常に藤原氏が政治的に優位に立ってきたという歴史的事実に反して、源氏を中心とする王族が政治的優位を誇っている。作者紫式部は、自らも藤原氏出身であるうえに、主人と仰いだ中宮彰子の父が藤原道長であることを考えると、歴史を越えようとする新しい物語の創造として、『源氏物語』を執筆したものと考えられる。

『源氏物語』における登場人物

男性群像

光ひかる源げん氏じ桐壺帝まりつばのみかどの第二皇子おうじで物語の主人公。母*(桐壺の更衣)と死別後、父帝ちちみかどは、源氏を臣籍に降下させ、源氏〃と名のらせた。光〃とは、光りかがやく人(理想的な人)を意味し、源氏〃とは、皇族出身という意味である。したがって、光源氏は、かの〃かぐや姫〃(光りかがやく人)の文学的な系譜を継いでいる。光源氏は、十二歳で元服し、葵あおいの上うへ(十六歳)を正妻に迎えるが、義理の母・藤壺と密通し、さらにさまざまな女性遍歴をくり広げる。その中で、桐壺の更衣―藤壺―紫の上―女三の宮と続く、紫のゆかりの女性たちがヒロインである。なお、光源氏の歴史上のモデルについてはさまざま人物があげられているが、前半(苦難流浪の時期)の光源氏は、醍醐帝の皇子であった西宮にしのみやの左大臣さみん源高たか明あきらであり、後半(栄華の時期)の光源氏は、藤原道長を中心的なモデルとしているとみられる。*
更衣せい 更衣は、もとは天皇の着物の着がえに奉仕する女官であったが、次第に中宮・女御に次ぐ妃的な存在となつた。*
源高明げんこうめい 母の身分が低かったので臣籍に降下し、源氏姓を名のり、有能であったために左大臣まで昇りつめたが、安和の変(九六九)で藤原氏のために太宰権師たさいごんしに左遷されて失脚した。

光源氏を愛した女性たち

光源氏——桐壺帝の第二皇子・主人公

いつの帝みかどの時代であったか、後宮こうきゅうに仕える多くの女性たちの中で、帝ちの寵愛ちようあいを一身いつしんに集めていたのは、美しい桐壺とういの更衣こういという人であった。

更衣は、家柄けいへが高くないことに加えて、確固かくことした後見人ごみんもいない境遇きんぐいの中で、他に女性たちの嫉妬しよとにさらされて心労しんろうの多い日々を送っていた。そんな中で、帝ちの愛情あいじやうが深まって、更衣は、美しい第二皇子だいにしうじ（光源氏）を生んだが、第一皇子だいいし（朱雀帝すゑてい）の母として今を時めく弘徽殿こうきでんの女御にようごの圧迫あつぱくの中で、皇子みこが三歳の夏、ついに病死びやうじしてしまった。

最愛さいあいの更衣こういを失った帝ちは、悲嘆ひたんのあまりに政治せいじをも顧みず、幼い皇子みこが服喪ふくそうしている更衣こういの実家じけを側近そくきんの女房にようぼうに慰問ゐもんさせたりして、ありし日に永遠えいゑんの愛あいを誓ちかい合った更衣こういの面影おもかげを慕こうばかりであった。

その後、帝ちが更衣こういの忘れ形見わすれがたみである第二皇子だいにしうじを最愛さいあいしたので、世間よこしまの人々は、

読解のポイント

①光源氏——「光る」は理想的な人間像
「輝く人」である。「かぐや姫」の影
響

②光源氏の不幸

桐壺帝と桐壺更衣との身分秩序に反
した純愛によって生まれる↓政治
的に不利

幼児に母を失う↓マザコン↓年上の
女性（藤壺・六条御息所・空蝉）

への思慕

皇子から貴族に格下げ↓賜姓源氏↓
王権喪失するも潜在王権を有する
↓最後は准太上天皇（上皇に准ず
る待遇）となる

第一皇子をさしおいて第二皇子が皇太子になるのではないかと噂し合った。しかし、父帝は、高麗（朝鮮）の人相見の予言を考え、後見人のいないことを憂慮して、第二皇子を臣籍に降下させ、賜姓源氏とした。

かくして、源氏は、十二歳で元服し、左大臣家の葵の上（十六歳）と結婚した。その後、左大臣家の婿となつた源氏は、皇太子となつた兄の第一皇子（朱雀帝）の後見である右大臣家との政治的対立の渦中に巻きこまれてゆく。家庭においても、高貴な家の深窓に育つた正妻葵の上がとりすました年上の妻であつたために、夫婦らしい親愛の情をもつことができないままに、形ばかりの結婚の中で、次第に左大臣家から足が遠のいていった。

そんな少年源氏の胸中には、実は片時も忘れえぬ人の面影が宿つていたのであつた。その人は、亡き母・更衣にそっくりであつたために父帝の妃として迎えられた、彼には義理の母（継母）にあたる藤壺の女御（十七歳）であつた。藤壺は、先帝の皇女で、「輝く日の宮」と呼ばれ、「光る源氏」と並び称された。いつも若々しく美しい藤壺を母代わりとして慕う源氏は、いつしか年上の女性として愛するようになり、あのような素敵な人を妻として迎えたいものだとさえ思うようになってゆく。

しかし、元服した源氏は、もはや藤壺の部屋へは入ることができなくなり、かすかに漏れくる彼女の若々しい声に聞き耳を立てながら自らを慰め、次第に遠ざかりゆく影を慕いつつ、少年の胸をひそかに痛めるばかりであつた。

賜姓源氏 皇族が天皇から源氏の姓を賜つて普通の貴族になること。

かくして、満たされることのない源氏の青春の女性遍歴が始発する。源氏が愛した女性たちは、

Aタイプ（紫のゆかりの女性たち）

藤壺—紫の上—女三の宮

Bタイプ（上流出身の妃的存在）

藤壺—六条御息所—朧月夜

Cタイプ（中流女性）

空蟬—夕顔—末摘花—玉鬘

花散里—明石の君

などのさまざまタイプ的女性たちであった。

空蟬—老伊予の介の後妻・源氏の愛人

十七歳となった源氏は、雨夜の品定め^{あまよ しのさだ}の翌日、家来の紀伊の守の中川の邸^{やしき}に泊まりに行つた。そこには、かねてから噂に聞いていた老伊予の介の若い後妻空蟬が滞在していた。空蟬は、中納言の娘として宮仕えに出るはずであったが、早くに両親を失い、後見する人もないまま、今では弟の小君^{こぎみ}とともに、思いがけなくも老受領^{ずりょう}の後妻として世話になつていた。

若き源氏は、昨夜の女性談議での中流女性の話を思い出し、いたく興味をそそ

読解のポイント

- ① 中流女性の不運な悲恋の物語↓作者
紫式部の自伝的物語
- ② 中流女性の倫理的身分意識から開放
されない暗い宿命的な物語
- ③ 老受領の後妻で父母の後見もないと
いう自己の宿命を見すえた中流女性
の賢い生き方

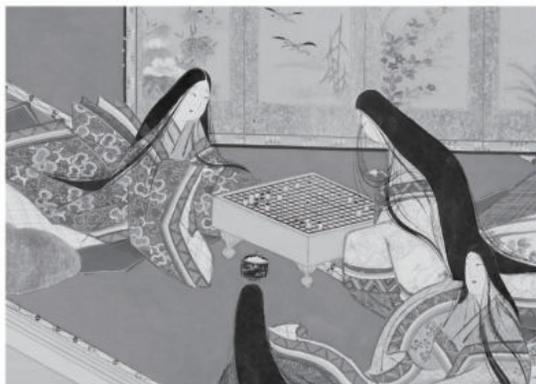
られて夜更け方に空蟬の部屋に忍びこんだ。しかし、空蟬は、思慮深くつましい人妻で、なかなかなびこうとはせず、老受領の後妻にすぎない今ではなく、若い娘の時分にプロポーズされていたならばと、わが不運な人生を嘆き悲しむよりほかはなかった。

源氏は、そんな空蟬の奥ゆかしい人柄に魅惑され、小君に託して恋文を贈ったが、空蟬からの返事はなく、やむなく再び中川の邸を訪れた。空蟬は、源氏の愛情を内心ではうれしく思いながらも、しがない老受領の後妻である自分と高貴な若い源氏との身分差を考え、どうにもならないわが運命とあきらめ、悲しい思いで源氏との逢瀬を避け続けた。

そうした折、継子の紀伊の守が地方へ下ることになり、女性たちだけが留守を守るという機会がやってきた。待ち遠しく思っていた源氏は、勇んで三たび中川の邸を訪れた。継娘（軒端の菘）と碁を打っている空蟬をのぞき見た源氏は、空蟬が小柄でほっそりとしており、人妻らしい奥ゆかしい落ち着きをもった様子であるのに魅了されてしまった。源氏は、夜になってから、小君の手引きで、心をおどらせながら、母娘が寝ている部屋へ忍びこんだ。

そのときの空蟬は、夢のようであった源氏との一夜を思つて寝つかれずにいたが、ふと男性の衣ずれの音と香の匂いに気づき、薄衣を残したままで、いちはやく逃れて身を隠してしまった。

そんなこととも知らない源氏は、ひとり残された軒端の菘を空蟬だと思つて強



碁

引に言い寄ったが、まもなく空蟬に逃げられたことを知り、その頑固な薄情さにあきれ果て、拒絶された悔しさをかみしめるばかりで、薄衣だけをむなしく持ち帰った。

若き源氏は、初めての失恋のほろ苦い思いの中で、空蟬のかたくなで薄情な態度ゆえに、かえって恋の未練をかき立てられていた。

その後、源氏は、老夫とともに遠い伊予の国（愛媛県）へ旅立つ空蟬に、かの思い出の薄衣を返した。

かくして十二年の歳月が流れ、明石から帰還した源氏二十九歳は、逢坂＊おうさかの関で、帰京の途にあつた空蟬と、はからずも再会し、若き日に愛した人妻をなつかしく思った。その後、老夫常陸ひたちの介すけは、義理の息子たちに空蟬のことを頼んで他界したが、息子たちは、若い継母空蟬につらく当たるようになり、紀伊の守も、好き者めいた心から継母空蟬に強引に言い寄った。空蟬は、自らの運命の悲しさを見さわめるように、誰に告げることなく、ひとりさびしく尼になつてしまった。

歳月は流れ、薄幸の空蟬の尼は、源氏の二条東院ひがしのいんに引き取られ、ひたすら仏道に専心する安穩あんゑんな生活の中に晩年を送った。源氏は、奥ゆかしい人妻が仏道に専心する姿を見て、いささか残念に思うこともあつた。

夕ゆふ 顔がお—頭こゝろの中ちゆうじゆう 将しょうと源氏の愛人

逢坂の関 京都と近江の国（滋賀県）との国境にあつた関所で、都と東国を結ぶ出入口。